

京都に将来された楽浪塼について

高 正 龍

1. はじめに

ここで紹介しようとする塼は、京都市中京区東洞院通り御池上る舟屋町に所在した洋風建築の暖炉に使用されていたものである。この建物が解体されることになり、縁あって筆者のもとにその中の9点もたらされた。ここに使われた塼は日本で作られたものではなく、楽浪郡時代のものであった。

紀元前108年より朝鮮半島に漢四郡が設置され、その後四百年余りの中国の郡県支配が始まることになる。四郡とは楽浪・玄菟・真番・臨屯を指すが、同82年には真番・臨屯の両郡は廃され、また玄菟郡も同75年に西北方に移動し、半島には楽浪郡のみが残ることになる。ついで紀元後204年には帯方郡が楽浪郡の南部をさいて設置される(図1)。その間楽浪郡の支配は漢・公孫氏・魏・晋へと替わるが、同313年に高句麗がこれを滅亡させるまで、楽浪郡は一貫して平壤を中心として置かれていたため、これを楽浪郡時代と呼び慣わしている。

言うまでもなく、これら楽浪塼は、半島を日本が植民地としていた時代に「骨董品」として運び込まれたものである。京都には伊藤庄兵衛という朝鮮瓦塼の著名な蒐集家がいた。伊藤の蒐集品は戦後に井内功の所蔵となり、図録が刊行されることになるが、ここには実に195点にのぼる楽浪塼が掲載されている⁽¹⁾。

ところで本塼は暖炉に使われていたため、その規格に合うように惜し気もなく裁断されている。また接着剤としてモルタルが付着しているため、本来の骨董品としての価値を著しく減じている。洋館の所有者は、物を集めるという意味での一般的なコレクターではなかったと言えるだろう。暖炉に塼が使用されていたことを聞いたときに、まず頭に浮かんだのが以下の料治熊太氏の楽浪郡治のあった平壤土城里での体験談である⁽²⁾。

村に入って間もなくのこと、私はほこりっぼい道で何か硬いものを靴で蹴とばした。何気なく取り上げてみると塼の破片であった。しかも何かの写真集で見た「仙兎搗薬文」という有名な塼であったので、

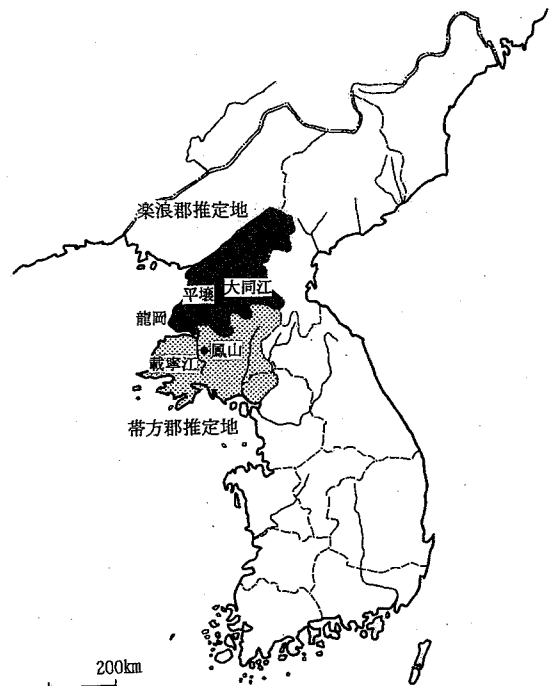


図1 楽浪・帯方郡の位置

ドキッとすると驚いた。よく見ると文様のないものならそこらあたりに、漢代の瓦や磚の破片がころがっていたし、みちのかたえにうず高く積まれている石ころは大半瓦片であった。そんなところに足をとどめっていると、先行した金さんは桑畑の中から私を呼んでいる。金さんの知り人なのかこの家の中に入ってみろという。驚いたことにその家のオンドルはみんな漢代の磚で構築されているのである。

家の中は薄暗かったが、文字のある磚、年号のある磚、白虎文のある磚、魚文のある磚などがまじってオンドルの炉ができていた。見たところこの村でも貧農の部類に属する家らしいのだが、私はカッカッと上気してその有様に度肝を潰してしまった。家人の許しを得てその中の何枚かを拓本にとったが画箋紙の上に描き出されていく文様を見ていると、いよいよ感動が高まっていくのを感じた。よく見ると、いくら硬い磚でもオンドルにしていると角が欠けたりしている。いかにももったいない気がした。オンドルなら今の煉瓦でもいいではないかと思った。そこで案内の金さんに交渉して、もし譲ってくれるなら欲しいがといった。すると四つや五つでは困るが、全部まとめて買ってくれるならば売ってもいい。だいたい完全なものは百個ほどあるから、百円で買ってくれるならば売ってもいいという。

(中略) 帰京して、国分寺古瓦拓本集を作ることで親しくさせていただいた住田正一氏にその時の話をした。住田氏はその話をきくと、ぜひ私にその権利を譲っていただけませんかといって、私が逡巡しているうちに手配されて買取ってしまわれた。

筆者は、このような逸話⁽³⁾が好事家の間に取沙汰され、洋館の所有者はこの話からヒントを得て暖炉に磚を用いたと想像している。当時、庭を飾るために多くの石塔・燈籠などの石造物が日本へ運び込まれた⁽⁴⁾が、磚のこのような使われ方もこれと一脈を通じるところがあるのだろう。

このようなことがあり、楽浪磚について興味を持つようになった。調べていくと、これまで楽浪磚については文様部分の写真が主に報告の対象となっており、計測値・色調・焼成・調整など個別的特徴については、あまり語られてはいないことがわかった。また、一般に研究は不振であり、その編年は確立されていない。その一方で、楽浪墳墓を考える上で磚の重要性は認識されており、木槨墓と磚室墓の併行関係、盗掘によって遺物の遺存が悪い磚室墓を考える上で、磚の編年が俟たれるところである。本磚は完形品がないものの、基礎的資料としての価値は十分に備えており、紀要の紙面を借りて資料紹介を行なうことにする。

2. 楽浪磚の概要

遺 跡 楽浪磚は、楽浪・帯方の郡・県治の置かれた土塁を廻らす「土城」⁽⁶⁾や同時代の墳墓などから発見されている。楽浪土城の調

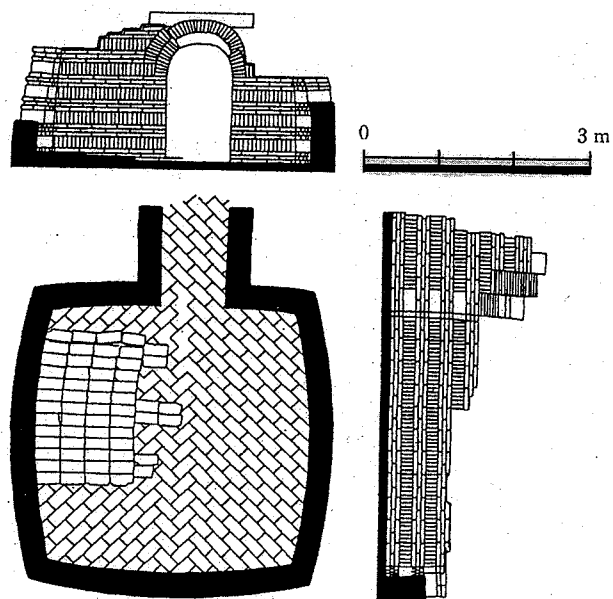


図2 楽浪磚室墓 (石巖里99号墳)

査では、埴で造られた建物・井戸などや埴を敷き詰めた舗道が検出されている⁽⁷⁾。いっぽうこの時代の墳墓には、木槨墓と埴室墓(図2)などがあるが、埴は埴室墓の構築材としてだけでなく、木槨墓に埴を用いるものも存在する。

楽浪郡と帯方郡の境域は、現在の平安南道・黄海北道・黄海南道地域にあたり、楽浪郡の郡治は平壤市楽浪区域にある大同江南岸の楽浪土城である。その南に広がる貞柏里・石巖里などに所在する、いわゆる大同江面古墳群では多くの埴を使用した墳墓が発見されている(図3)。帯方郡は黄海北道鳳山郡の智塔里土城が帯方郡治と推定され、この載寧江流域に多くの古墳群が存在することが分かっている。

形態と特徴 埴は形態上4種に分類することができる(図4)。その名称については研究者によって異なるが、ここでは小川敬吉のもの⁽⁸⁾を採用する。一は普通埴である。長条埴・条埴とも呼ばれ、最も一般的な埴形態で、現在の煉瓦と同じく長方体をなす。文様は長側面と短側面のそれぞれ一方ずつにあるのが普通である。二は柵付埴である。短側面の一方に柵を作り、もう一方に柵穴を設ける。隣接する埴と埴との結合を堅固にする工夫で、普通埴に次いでよく見られる埴形態である。文様は長側面の片方にのみ見られる。三は楔形埴である。短側面が台形をなす。埴室の^{アーク}拱門などの構築材として使用される。文様は厚さの薄い方の長側面と短側面に見られる。四は撥形埴である。異なる長さの短側面をもち、上下面が台形をなす。これは埴室の^{ドーム}穹窿天井や井戸の構築材などに利用された。文様は短い方の短側面にある。

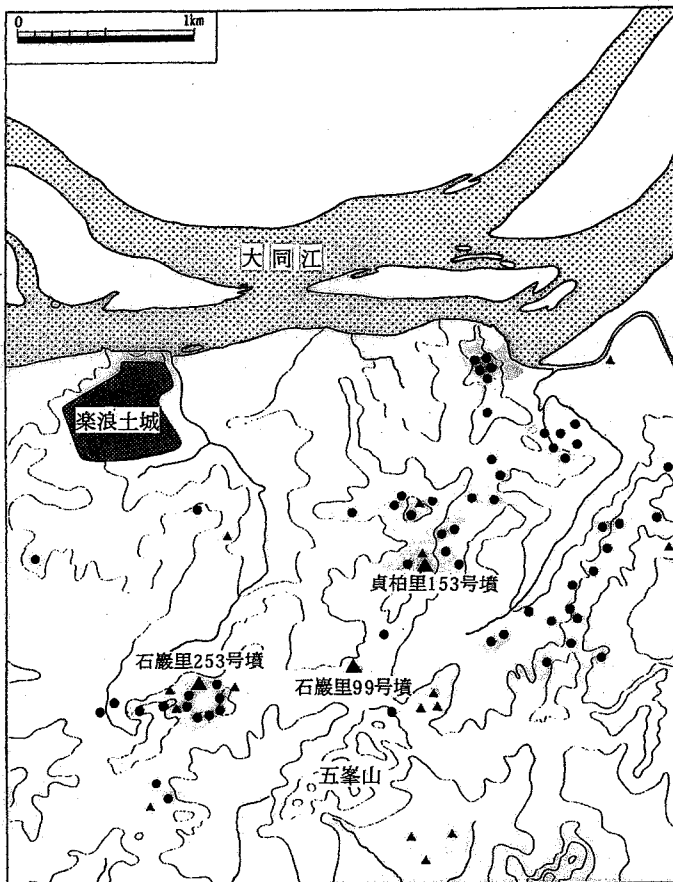


図3 楽浪土城と古墳群 (●: 木槨墓、▲: 埴室墓)

埴の色調は灰色系が多く、焼成は硬質のものとやや軟質のもの

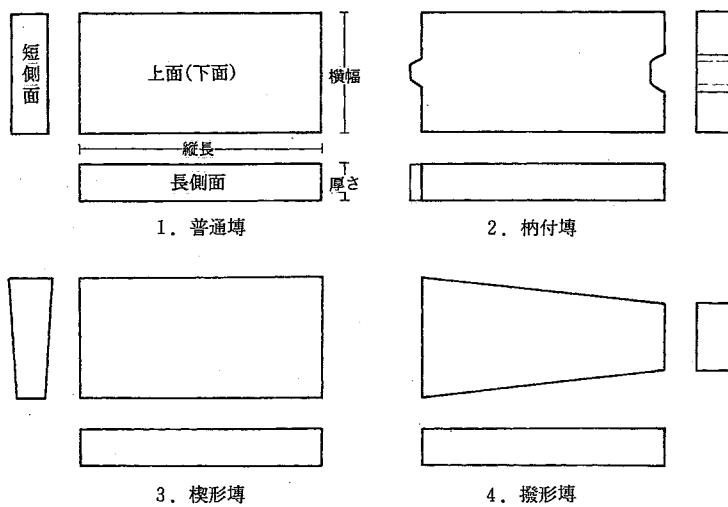


図4 楽浪埴の形態4種

のがある。塼の平均的な大きさは、長さ約32cm、幅約16cm、厚さ約5cmほどである。上下面の一方に縄目痕跡があり、もう一方は未調整のままである（縄目のある方を上面、ない方を下面とする）。

文様面（文字を含む、以下同じ）は前述のように短側面や長側面に存在する。文様の種類は、大きく幾何学文、銭文、文字、動物・人物文などに分けることができる⁽⁹⁾。その内多数を占めるものは菱形文・曲線文・格子文などの幾何学文を有するものである。文字には年号・姓・吉祥語などが記されている。

3. 資料の紹介

先に述べたように、これまで楽浪塼については、大判の写真がいくつかの報告や図録などに掲載されているものの、個々の計測値・調整などについては不明なところが多い。また拓本が提示されているものが少なく、たとえ拓本がある場合でも文様面に限定されている⁽¹⁰⁾。小稿では6面すべての拓本を採ることによって実測図に代え、柵付塼については、拓本に加え柵と柵穴の形状を断面図で表わすことにする。

1 (図5-1)

形態は普通塼。縦長34.7cm、横幅16.5cm、厚さ5.0cm⁽¹¹⁾。色調は灰～灰黒色。胎土は密。焼成はやや軟。上面全体に縄叩きをほどこす。上面と文様面以外は調整の痕跡は見られない。

文様面は長側面と短側面の各1面にある。文様は区画線を伴わず、側面全体にひろがる。ともに重複した菱形文を表わすが、短側面の方は空白部を格子文で埋めている。

『朝鮮瓦塼図譜Ⅰ』195と同範と見られる。この塼は平壤大同江面古墳群地帯出土と伝えられている。

2 (図5-2、写真2・3)

形態は普通塼。縦長33.6cm、残存横幅14.1cm、厚さ4.4cm。色調は灰色。胎土は密。焼成はやや軟。上面の縄叩きは、文様をもつ長側面に近い部分でやや段をなしている（写真2）。上面と文様面以外は調整の痕跡は見られないが、短側面端の一部がバリ状にやや突出している（写真3）。

文様面は長側面と短側面の各1面にある。文様はともに区画線を伴わず、側面全体にひろがる。長・短側面とも3本の平行線で鋸歯文あるいは三角文をつくるが、細部は異なる。

『楽浪郡時代の遺跡』1022・1023や『朝鮮瓦塼図譜Ⅰ』194と同範と見られる。前者は大同江面、後者は大同江面古墳群地帯出土と伝えられている。

3 (図5-3・6-A、写真7)

形態は普通塼。縦長32.1cm、横幅15.0cm、厚さ5.0cm。色調は灰青～灰黒色。胎土は密。焼成は硬。上面の縄叩きは、文様をもつ長側面に近い部分には見られず、ナデが観察される。上面と文様面以外はとくに調整の痕跡は見られない。下面には、残存長1.9cmの土器小片が付着している。（写真7）器壁の薄い灰色泥質（瓦質）土器の口縁部と思われる。

文様面は長側面と短側面の各1面にある。長側面は区画線の中にS字文・菱形文などの幾何学

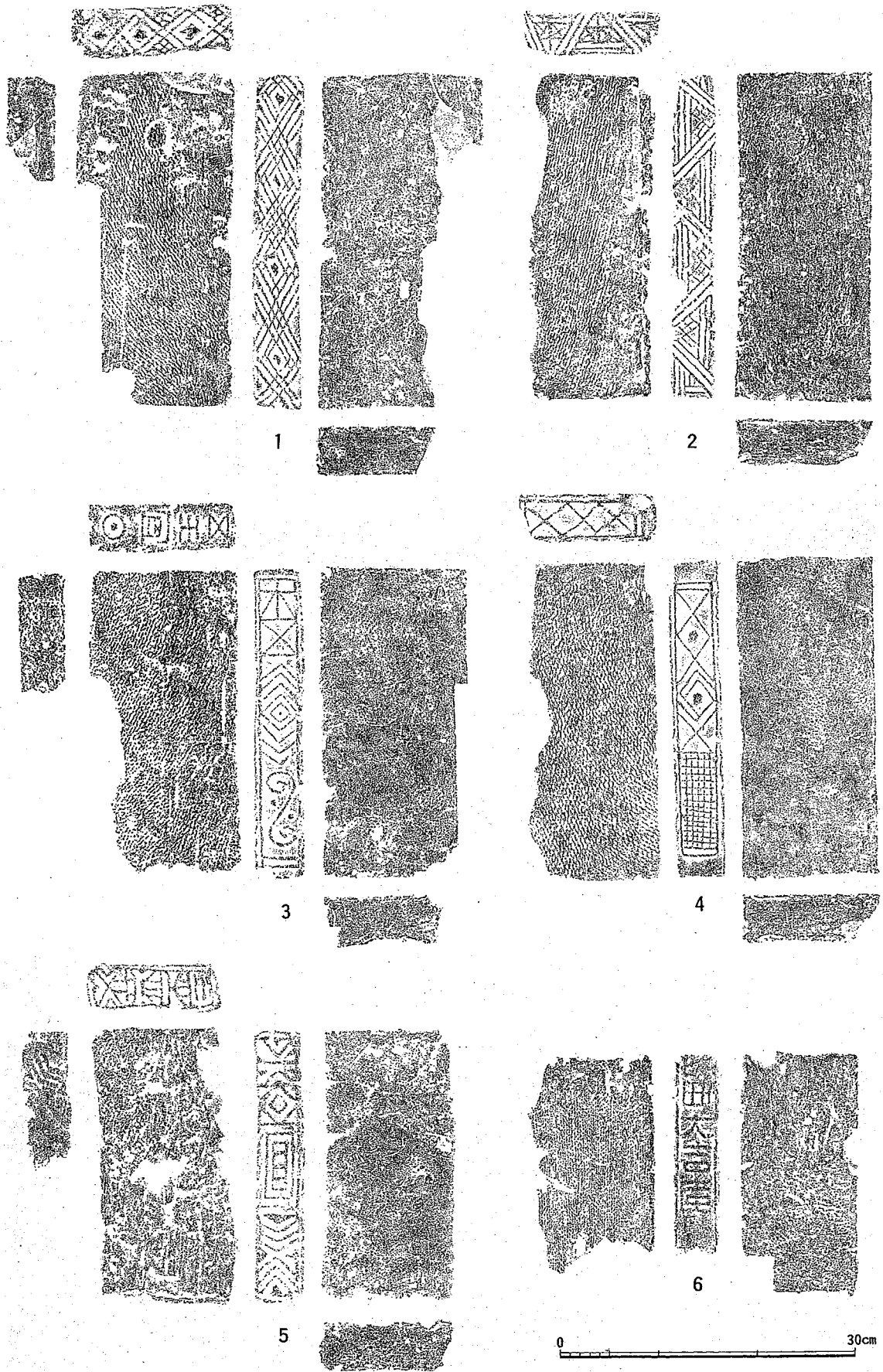
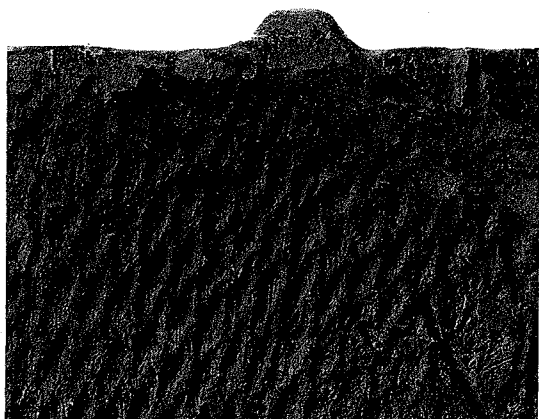


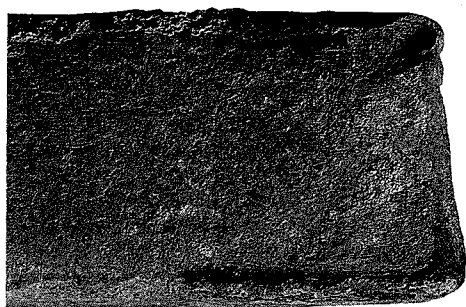
図5 本埴拓影 (1 : 6)



1



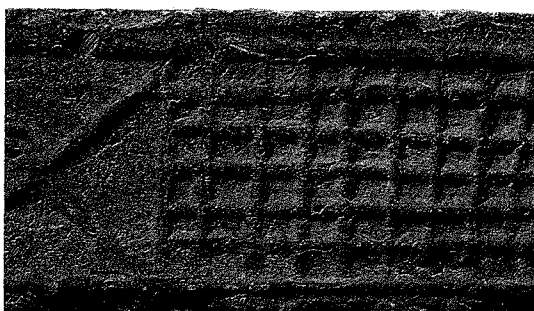
2



3



4



5



6



7



8

写真1～8 埴各部位

文を配する。短側面は「王宜」の文字がある。これはその前後を文様としてでなく、篆書体の五ならびに日と捉え「五王宜日」と読む見解もある。

この埴は1916年に調査された石巖里253号墳（大同江面10号墳）出土のものと同範である⁽¹⁴⁾。この墳墓からはこの他にも短側面に「王平」⁽¹⁵⁾（図6-A）・「王」の文字のあるものがあり、王は氏を表わすと考えられている。王氏は楽浪郡の著名な支配層であり⁽¹⁶⁾、発掘調査された墳墓の中には王光や王肝など被葬者の明らかなったものもある。いっぽう宜・平はその名ではなく、ともに死者の平安や子孫の幸福を願う、吉祥の文字と理解されている。姓氏は、①被葬者、②墓の造営（発注）者（寿墓である場合は①と同じ）、③墓造営の監督者、④埴の製作者の四者の可能性が考えられる⁽¹⁷⁾。本墓の場合、それに吉祥語を伴う点や多数の埴の文字面を表に出して銘文を強調している点から、前二者とすべきだろう。

4（図5-4、写真5）

形態は普通埴。縦長32.8cm、残存横幅14.1cm、厚さ4.9cm。色調は灰褐～灰黒色。胎土は密。焼成は硬。上面全体に縄叩きをほどこす。上面と文様面以外はとくに調整の痕跡は見られないが、短側面端の一部がバリ状にやや突出している。

文様面は長側面と短側面の各1面にある。長側面は区画線の中に菱形文・格子文・×文などの幾何学文を配する（写真5）。短側面は区画線の中に菱形文あるいは×文を配する。

『楽浪郡時代の遺跡』図版998のキャプションには貞柏里153号墳（大同江面第5号墳）出土とあるが、その本文編の同墳築造埴には本埴は見当たらない。『朝鮮瓦埴図譜Ⅰ』160も同范例で、これは大同江面貞柏里出土とある。いずれにせよ平壤付近の墳墓から出土したとみて良いだろう。

5（図5-5、写真4・8）

形態は普通埴。縦長27.7cm、横幅13.3cm、厚さ4.6～4.9cm。色調は灰青～灰黒色。胎土はやや粗。焼成は硬。上面は大きな^す鬆がいくつか生じた粗悪品である。これを修正するためか、縦方向に粗いナデを施す。一部縄叩きのような痕跡が見えるが、確然としない。また文様のない長側面に山形の叩きが見られる（写真4）。下面は未調整でスサ・粉の圧痕がある（写真8）。

文様面は長側面と短側面の各1面にある。長側面は区画線の中に方格文・山形文・菱形文などの幾何学文様を配する。短側面も同様に区画線の中に屋形船状にも見える幾何学文様を配する。同范例は未見であるが、個々の文様は類例がある。楽浪埴としては最も小型に属するもので、全体的に粗雑であり、縄叩きがはっきりしないなど、1～4・6とはかなり異質である。

6（図5-6・6-B）

短側面がともに欠損しているが、形態は普通埴と推定される。残存縦長24.0cm、残存横幅13.0cm、厚さ4.7cm。色調は黄褐色。胎土は密。焼成は軟。上面は比較的細かい目の縄叩きをほどこす。下面は未調整である。

文様は欠損しているため、京都大学文学部博物館所蔵品の中の同范例（図6-B）をもとに解説する。文様面は長側面と短側面の各1面にある。長側面は区画線内に「□□大吉壽大刑」とあり、始めの2字については解説されていない。短側面は区画線の中に、方形文や菱形文などの比

較的簡素な幾何学文を配する。京大磚は縦長32.0cm、残存横幅15.8cm、厚さ4.6~5.0cmを測る。京大例は大同江面石巖洞出土で、平安南道庁より寄贈されたものである⁽¹⁸⁾。また『楽浪郡時代の遺跡』76も大同江面出土とされている。

7 (図7-7、写真1・6・表1)

形態は柵付磚。縦長32.3cm、残存横幅14.0cm、厚さ5.0cm。色調は灰黒色。胎土は密。焼成はやや軟。上面は比較的粗い目の縄叩きをほどこす(写真1)。下面是縦方向にナデを行なう。其他は未調整である。

文様は長側面の一方で確認される。文様は区画線で4区に分ち、菱形文・格子文といった幾何学文を配する。柵は柵穴(写真6)に比べ小振りである。

柵付磚ではないが、普通磚の中に同範と見られるものが2点ある。『朝鮮瓦磚図譜I』100と151がそれで前者は大同江面古墳群地帯出土とされる。

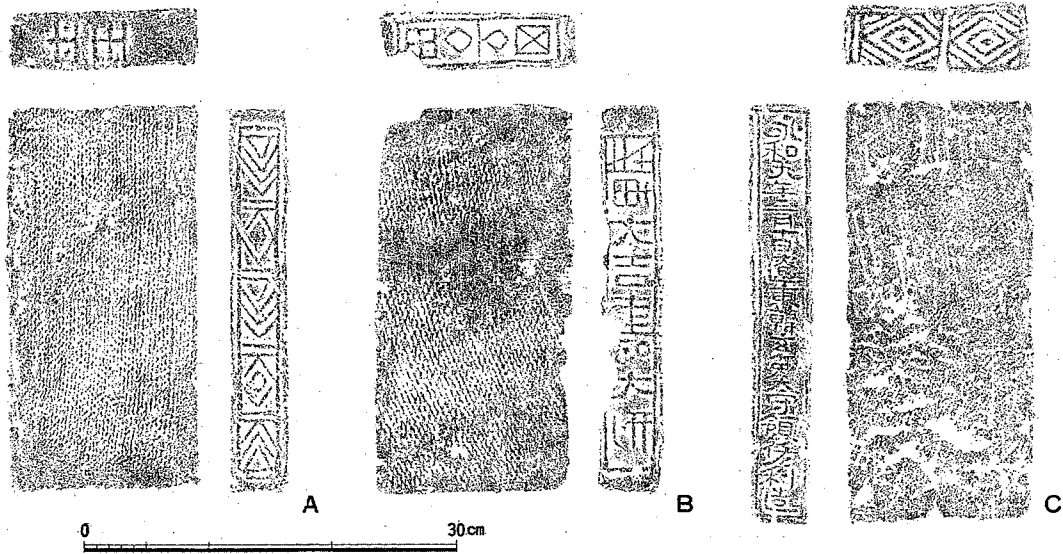


図6 京都大学文学部博物館所蔵拓影(1:6)
「王平」銘磚:縦長31.7cm、横長15.4cm、厚さ4.8cm
「永和」銘磚:縦長34.8cm、横長15.1cm、厚さ5.0~5.9cm

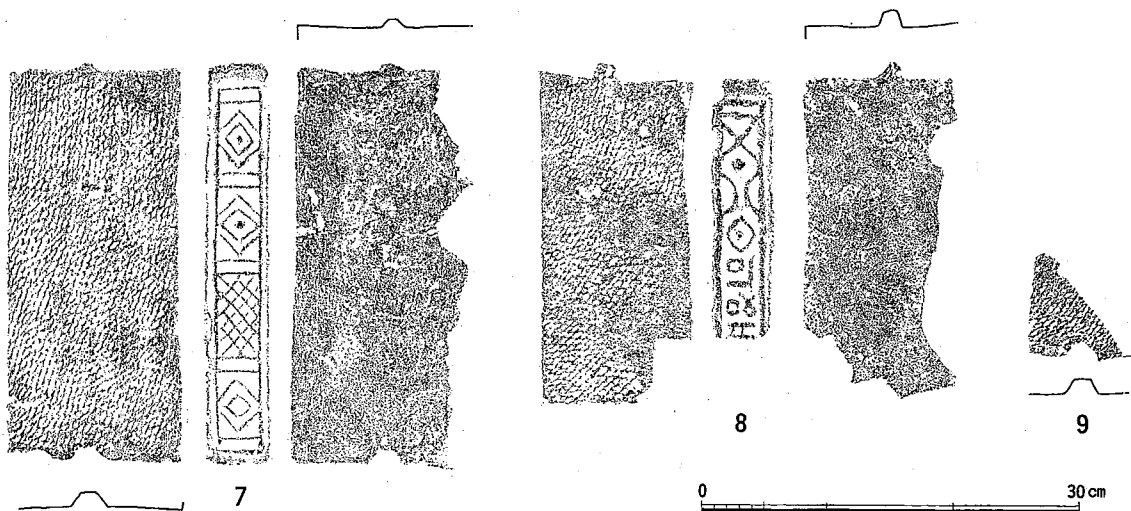


図7 本磚拓影・実測図(1:6)

8 (図7-8・図8・表1)

形態は柄付埴。残存縦長21.1cm、残存横幅12.0cm、厚さ4.6cm。縦長は復原すると28cmほどになり、小型に属する。色調は灰色。胎土は密。焼成は硬。上面全体に縄叩きをほどこす。下面・短側面は未調整であるが、柄に指頭痕がある。また下面にスサの圧痕がある。

文様は長側面の一方で確認される。区画線の中に文字と円弧文・×文などの幾何学文を配する。文字は同范例から「堅如石」と判断される。拓本は逆になっており少し分かりにくいですが、堅の土の部分と如・石が見える。これは一般に墓の永固を祈願する語句と解されている。四世紀代の築造と考えられる高句麗太王陵発見の「願太王陵安如山固如岳」(図8)という銘文が想起される。

『楽浪郡時代の遺跡』75や『朝鮮瓦埴図譜』87と同范例である。前者は大同江面、後者は大同江面古墳群地帯出土と伝えられている。

9 (図7-9)

柄付埴の柄部分だけが残存する。残存長8cm。厚さ5.0cm。色調は灰~黒褐色。胎土は粗、顕著に砂粒を含む。焼成は硬。上面は縄叩き。

		7	8	9	計測箇所
柄	a	0.65	1.0	—	
	b	2.0	2.0	—	
	c	0.65	1.4	—	
柄穴	a	1.2	—	1.2	
	b	3.0	—	2.9	
	c	1.1	—	1.1	

表1 柄付埴の柄と柄穴の計測値

4. 資料の検討

出土地 以上個別に同范例を挙げたように、ここで紹介した埴は、ほとんどが楽浪土城に隣接する古墳群から出土したと考えられる。いっぽう5は同范例を求めることができなかった。5は平安南道龍岡郡龍月面葛峴里出土の埴(図8)と文様構成が似ており、あるいはこの地方との関連が考えられるのだろうか。本埴のように中央に長方形を間じきる方格文を配する例は、極めて少ないとされる⁽¹⁹⁾。また5は粗悪品であり、葛峴里例が大同江付近から出土するものに比べ、「多少粗樸の風がある」という点で共通点がみられる。龍月面付近は楽浪郡の属県の一つ黏蟬県に比定されている⁽²¹⁾。

製作技法 後代の文献ではあるが、『天工開物』⁽²²⁾には埴の製作において、粘土を木枠の中に詰め、鉄線弓によって底においた板から切り離す場面が図示されている(図9)。本埴にはこのような粘土を弓で切り離した痕跡はないが、文様のない長・短側面が未調整のままであること、また民俗例⁽²³⁾などからみても、同様に方形の木枠によって成形されたと考えてよいだろう。同じく柄付埴の短側面にある柄ならびに柄穴も、7のように柄部分を手直ししたものがあるが、基本的には未調整であり、これ

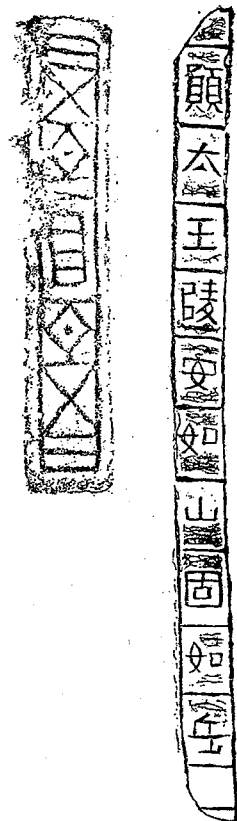


図8 高句麗太王陵埴(右)、葛峴里埴(左)

も型枠によるものと考えられる（写真6）。

上面は縄目痕跡が観察される。これは言うまでもなく塼を叩き締めた痕跡であろう。製作のいつの時点でこのような叩き締めを行なったのだろうか。やはり粘土を型枠に入れた後、成形時に行なわれたと見るのが無難だろう。2（写真2）のように長側面に沿って段差を生じたものがあるが、これは型枠を意識したために生じたものではないか。また2と4では、短側面側端の一部がややバリ状に突出するが（写真3）、これは上方より叩き締められた際に、型枠からはみ出した粘土であろう。

下面はすべて未調整である。底に板を敷いたのか、底板付きの型枠を使用したのか、あるいは他の平らなものを利用したものと考えられる。底面は側面に比べ接地面が大きいので、『天工開物』では弓を利用して切り離している。楽浪塼では、どのようにして粘土を剥離させたのだろうか。5・8にはスサなどの圧痕（写真7）が残るが、極部的であり、これをもって剥離剤とするのは難しい。民俗例では剥離のため灰を使用している。

文様（写真5）の施文方法は、型枠からはずした後に、文様を箆によって施文する方法と型枠にあらかじめ文様を彫り込んで施文する二つの方法が考えられる。後者の場合、型枠に対して垂直方向に抜くと文様が潰れるので、型枠は簡単に分解できたことが前提になる。7では形態の異なる普通塼と柵付塼の間で同範関係になるものがあり、これは前者の方法を示すものだろう。

時 期 楽浪塼の中には紀年銘をもつものがあり、塼が造られた時期をある程度推定することができる。一般に認められる最古の遺例は「光和五年韓氏造□」で、光和は後漢の年号で5年は181年にあたる。新しいものには永和九（353）年（図6-C）や元興三（404）年など楽浪郡滅亡後の紀年銘塼も存在する。滅亡後のものではあるが、これらは前代の墓制を受け継いだ墳墓に使用されており、広義の楽浪塼として取り扱われる⁽²⁴⁾。

ではその中で本塼はどの時期に位置付けられるのであろうか。楽浪塼については文様の整理が行なわれているが、編年的研究は少ない。楽浪墳墓の編年にあたり塼を検討とした高久健二氏の論考⁽³²⁾がまとまったものとしては唯一のものではなかろうか。この論考を紹介しながら本塼の製作時期のアウトラインを示しておく。

氏は塼の長側面の文様のうち菱形文および曲線文を型式学的な変化の方向を想定できるものとみなし、ついでこれらと他の文様の共伴関係



図9 『天工開物』の塼製作図

によって組列を組み、さらに長側面の縦と横の長さの比を用いて埴の形態的变化を求め編年を試みる。具体的には表2のように、菱形文を四重以上の精文の菱形の中に珠文を入れたAⅠ型式、三重の精文の菱形に珠文を入れたAⅡ型式、二重の精文の菱形に珠文を入れたAⅢ型式、二重あるいは三重のくずれた粗文の菱形の中に珠文を入れたAⅣ型式、二重の粗文の菱形のなかに珠文を入れないAⅤ型式に分類する。この菱形文の型式学的な変化の方向として、精文から粗文へという変化と文様の簡略化という点からAⅠからAⅤ型式へ変化すると考える。次に曲線文を文様の簡略化の傾向からBⅠ型式→BⅡ型式→BⅢ型式へ変化し、BⅣ型式とBⅤ型式の先後関係についてはBⅡ型式→BⅣ型式、BⅢ型式→BⅤ型式の変化からBⅣ型式の方がやや先行すると考える。BⅥ型式は最も退化したものと捉え最後尾に位置付けている。これら文様の共伴関係の検討などから、AⅠ・AⅡ・BⅠ・C、AⅢ・BⅡ・BⅢ・BⅣ・D・E、AⅣ・AⅤ・BⅤ・BⅥ・F～Oをそれぞれ埴Ⅰ期、埴Ⅱ期、埴Ⅲ期として相対編年する。

また形態的に長側面（文様面）の縦長（a）と厚さ（b）の比（ b/a ）を用いて、形態的な変化を導く。埴Ⅰ期が0.18～0.21、埴Ⅱ期が0.16～0.21、埴Ⅲ期が0.10～0.17と埴自体が次第に薄平たくなることを示す。氏が比を用いたのは、公表された計測値が少ないため、写真から算出したためである。

最後に埴Ⅰ期から埴Ⅲ期への編年観を自身の土器・鏡などの編年と対比させ検証を行ない、これらの年代観と紀年銘をもつ漆器などから絶対年代を導きだす。埴Ⅰ期を1世紀代、埴Ⅱ期を1世紀末葉から2世紀代とし、埴Ⅲ期の時期については、表3のように紀年銘埴の長側面の縦長と横幅の比と文様埴とそれを比較し、3世紀代（250～300年）の紀年銘をもつ埴の平均値0.149が埴Ⅲ期に近いことから3世紀以降とし、石室構造の検討からさらに3世紀前半代に限定する。

以上の高久氏の編年案に本埴を照らし合わせると、1・2は判断できないものの、その他は大體埴Ⅲ期に位置付けられるようである。⁽²⁶⁾すなわち3がAⅣ・H、4がAⅤ・F・I、5がAⅤ、7がAⅣ・AⅤ・G、8がBⅥ・Fと類似する文様を伴う。また6も極めて簡素な文様を有する点から埴Ⅲ期の可能性が高いだろう。いっぽうその実年代については、氏も埴Ⅲ期に後続する時

























	埴Ⅰ期	埴Ⅱ期	埴Ⅲ期
菱形文	  AⅠ型式 AⅡ型式	 AⅢ型式	  AⅣ型式 AⅤ型式
曲線文	 BⅠ型式	   BⅡ型式 BⅢ型式 BⅣ型式	  BⅤ型式 BⅥ型式
その他の文様	 C類	  D類 E類	     F類 G類 H類 I類 J類      K類 L類 M類 N類 O類

表2 埴の文様による編年表

期設定の可能性を指摘しているように、4世紀代に下る紀年銘埴の存在から、現状ではその時点までを下限とみるのが無難である。永和九年銘埴の短側面(図6-C)にも少なくともAIV型式と捉えることが可能な菱形文があるためである。

紀年銘埴	b/a	紀年銘埴	b/a	紀年銘埴	b/a
光和五年(182年)	0.162	嘉平二年(250年)	0.126	建興四年(316年)	0.154
興平二年(195年)	0.169	景元元年(260年)	0.167	永和八年(352年)	0.139
		景元三年(262年)	0.141	永和九年(353年)	0.138
		泰始七年(271年)	0.172	元興三年(404年)	0.111
		泰始十年(274年)	0.135	元興三年(404年)	0.112
		咸寧元年(275年)	0.152		
		太康元年(280年)	0.158		
		太康七年(286年)	0.119		
		太康九年(288年)	0.154		
		元康三年(293年)	0.169		
150~200年の平均値	0.166	250~300年の平均値	0.149	300年以降の平均値	0.131

表3 紀年銘埴の縦長(a)と厚さ(b)の比

5. おわりに

楽浪墳墓を研究する上で、その構築材として埴の考察が重要であることは言うまでもない。しかしながら楽浪郡時代の遺物の中でも埴は最も研究が遅れている分野の一つであり、高久氏が写真資料に依拠して埴の形態的变化を求めざるをえなかったのも、基礎的資料の欠如が要因としてある。埴の形態は単純ではあるが「製作技法についても詳細な観察から技術系譜の抽出が可能とみられる⁽²⁷⁾」という指摘もあり、今後資料が充実すれば飛躍的に理解が深まる可能性がある。日本国内に所蔵されている楽浪埴だけでも膨大な数にのぼるものと推定され、これらを集成・資料化し研究者が利用できる環境を作っていくことが、まず第一に行なうべき課題といえるだろう。小考を端緒として筆者自身もこのような作業を続けて行きたいと思う。(1997年12月15日稿了)

(謝辞) 小稿を作成するにあたり、写真は村井伸也・幸明綾子両氏、拓本の一部は能芝妙子氏のお手を煩わし、また下記の方々からも多くのご援助・ご教示を得た。ここに記して深く謝意を表するものである。

東潮・馬瀬智光・大竹弘之・川口慈郎・外池明江・竹谷俊夫・田中俊明・谷豊信・千田剛道・松波宏隆・宮川禎一・森下章司・吉井秀夫・吉川義彦 (五十音順/敬称略)

註

- (1) 井内功編『朝鮮瓦埴図譜』I 楽浪帯方 井内古文化研究室 1976年。
- (2) 本文は料治熊太「楽浪の瓦埴」(『小さな蕾』25号 1977年)によるが、残念ながら未見のまま、本文は井内功『朝鮮瓦埴研究史』(井内古文化研究室 1991年)の引用文による。
- (3) 1916年平安南道龍岡郡龍月面葛峴里で関野貞らもオンドルの煙突や建物基部に転用された埴を調査している。関野貞ほか『楽浪郡時代の遺蹟(図版上・下冊)』(古蹟調査特別報告第4冊)朝鮮総督府 1925年。関野貞ほか『楽浪郡時代の遺蹟(本文)』(古蹟調査特別報告第4冊)朝鮮総督府 1927年。
- (4) 李龜烈(南永昌訳)『失われた朝鮮文化 日本侵略下の韓国文化財秘話』新泉社 1993年。

- (5) 高久健二「楽浪墳墓の編年」『考古学雑誌』第78巻第4号 日本考古学会 1993年。
- (6) 谷豊信「楽浪郡時代の土城」『月刊考古学ジャーナル』392号 ニュー・サイエンス社 1995年。
- (7) 原田淑人・高橋勇・駒井和愛「楽浪土城址の調査(概報)」『昭和十二年度古蹟調査報告』朝鮮古蹟研究会 1938年。
- (8) 小川敬吉「楽浪の埴(上・下)」『朝鮮と建築』第6輯第9・10号 朝鮮建築会 1927年。
- (9) 文様の分類については関野貞ほか(3)前掲書に詳しい。
- (10) ただし、発表レジュメという性格上簡潔なものではあるが、次の文献には埴の拓本と個別のデータが整理されており参考になる。宮川禎一「帝塚山考古学研究所蔵の楽浪時代について」『帝塚山考古学談話会第555回記念 朝鮮の古瓦を考える』帝塚山考古学研究所 1996年。
- (11) 計測値は基本的に文様面の大きさを示した。すなわち縦長は長側面の長さ、横幅は短側面の長さ、厚さは長側面の厚みを計測している。よって柵付埴は柵の長さを含んでいない。
- (12) 井内功註1前掲書。
- (13) 関野貞ほか(3)前掲書。
- (14) 関野貞ほか(3)前掲書。
- (15) 図6 京都大学文学部博物館蔵の3点の埴については、実測・公表にあたり、同博物館の森下章司氏に大変お世話になった。
- (16) 今西龍「大同江南の古墳と楽浪王氏との関係」『東洋学報』第2巻 1912年。
- (17) 谷豊信「漢三国両晋南北朝紀年埴の分布と銘文」『東北アジアの考古学第二 槿域』東北亜細亜考古学研究会編 1996年。
- (18) 京都大学文学部博物館蔵の韓国関係文化財については次の文献に目録がある。
『日本所蔵韓国文化財』③ 高麗美術館・京都国立博物館・京都大学文学部博物館・奈良国立博物館・寧楽美術館・大阪市立美術館 韓国国際交流財団 1997年。
- (19) 関野貞ほか(3)前掲書(本文)。
- (20) 関野貞ほか(3)前掲書(本文)。
- (21) 谷豊信(6)前掲論文。
- (22) 宋応星撰(藪内清訳注)『天工開物』(『東洋文庫』130)平凡社 1969年。
- (23) 宮川禎一(10)前掲論文に中国の民俗例がとりあげられている。
- (24) 梅原末治「朝鮮北部出土紀年埴集録」『支那学』第7巻第1号 弘文堂書房 1933年。
- (25) 高久健二(5)前掲論文。
- (26) 小稿は編年が目的ではないので詳細は割愛するが、氏の埴編年にはいくつかの問題がある。たとえば法量比の問題に限定しても、まず写真のみに依拠し実際の資料にあたってない点は問題にならざるをえない。また表3の比の値が特に小さくなっている嘉平二年・景元三年・泰始十年・太康七年・永和八年・永和九年・元興三年銘埴は楔形埴であり、これを他の紀年銘をもつ普通埴と同列に扱ってよいのかは疑問である。
- (27) 宮川禎一(10)前掲論文。

本稿は、文部省平成9(1997)年度科学研究費補助金(奨励研究B)課題番号(09904052)による成果の一部である。

参考文献（註で引用したもの以外）

- (1) 野守健・樫本亀次郎「永和九年在銘埴出土古墳調査報告」『昭和七年度古蹟調査報告』朝鮮総督府 1933年。
- (2) 諸岡栄治編『楽浪及高句麗古瓦図譜』便利堂 1935年。
- (3) 小嶋健二「道内支那領時代の遺跡」『黄海道郷土誌』帝国地方行政学会朝鮮本部 1937年。
- (4) 八田実「楽浪の埴」『茶わん』8-11 宝雲舎 1938年。
- (5) 関野貞『朝鮮の建築と芸術』岩波書店 1941年。
- (6) 金鐘太「楽浪時代の 銘文考-瓦埴・封泥・印章을 中心으로-」『考古美術』第135号 韓国美術史学会 1977年。
- (7) 井内功編『朝鮮瓦埴図譜』Ⅶ 総説 井内古文化研究室 1981年。
- (8) 竹谷俊夫「楽浪の画像埴」『ひとものこころ 天理大学附属天理参考館蔵品』第1期第3巻 天理教道友社 1986年。
- (9) 『井内功寄贈瓦輒図録』国立中央博物館 1990年。
- (10) 『平成五年秋季特別展 弥生人の見た楽浪文化』大阪府立弥生文化博物館 1993年。
- (11) 洪潜植（吉井秀夫訳）「楽浪埴築墓に対する一考察」『古文化談叢』第32集 九州古文化研究会 1994年。
- (12) 田村晃一「楽浪・帯方郡の古墳について」『月刊考古学ジャーナル』392号 ニュー・サイエンス社 1995年。

図版・表出典

- 図1 参考文献10 P.6の4を基に作成
図2 参考文献11 第1図を改変
図3 註5 図2を改変
図4 註8 第1図を基に作成
図5～7 筆者作成
図8 参考文献7 挿図1、註3（本文）72（2）
図9 註22 図7-3
写真1～8 村井伸也氏撮影
表1 筆者作成
表2 註5 図12を基に構成
表3 註5 表9